



国際理解教育、一つの試み：地理選択クラスでの 「卒業レポート」

細見, 和弘

(Citation)

兵庫地理, 36:56-67

(Issue Date)

1991-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002375>



国際理解教育、一つの試み

—地理選択クラスでの「卒業レポート」—

細 見 和 弘

はじめに

筆者は以前から、生徒の居住する地域を対象とした地域学習を、地理授業の中心に据えたいと考えていた。この数年、それを生徒自らの調査・研究によって展開することを試みた。生徒の主体的学習活動ともいえるこの試みは、筆者の予想以上の成果を挙げ、それを勤務校（兵庫県立柏原高等学校）の所在地にちなんだ冊子、『ズームアップ水上』¹⁾としてまとめることができた。

今回さらに主体的学習活動を発展させたく考え、対象地域を国外に広げることを行った。具体的には、地理選択クラスの卒業レポートとして、生徒各自にどこか一国を取り上げさせ、調べてまとめさせた。そして、この卒業レポートを編集・印刷したものを、『翔』と名付けた冊子とした。なお、この実践では、地域が広がることによって、必然的にいわゆる国際理解教育からの視点も必要になっ

てきた。そこで、この冊子を作成した過程を中心に、筆者の行った国際理解教育の試みを、未熟ではあるが報告しておきたい。ご教示いただければ幸いである。

1. 国際理解教育

地理教育の効果について久保田武²⁾が「地理教育影響度測定調査」を行っている。これは高校1年の生徒が地理教育を受ける前と、1年間受けた後とで興味・関心がどう変化したかを調査し、地理学習の影響（効果と重複する）を測定しようとするものである。これによると国際理解に対する影響度の項目は大きな変化を示している（表1参照）。つまり地理教育は国際理解教育に大きな効果があったことを示すものといえよう。

ところで今日、「国際化」、「国際人」、「国際社会」、「国際理解教育」などの言葉をよく目にする

表1 地理学習影響度測定結果（1974～76年度の平均値、都立西高校）

地理学習内容項目	1 年 入 学 時						1 年 終 了 時						質 問
	5	4	3	2	1	平均値	5	4	3	2	1	平均値	
①エネルギー問題	17	36	29	12	6	3.46	49	36	12	3	0	4.31	①～②
②人口問題	14	34	28	18	6	3.32	35	47	14	4	0	4.13	5. 非常に関心、興味を持っている。
③環境問題	14	42	33	10	1	3.58	30	45	21	4	0	4.01	4. どちらかといえば関心興味を持っている。
*④マスコミの国際および国内政治・経済・社会問題についての報道	23	35	27	13	2	3.64	33	34	27	6	0	3.94	
⑤国際的諸問題	9	37	28	25	1	3.28	23	52	20	4	1	3.92	3. どちらともいえない。
⑥「地理」という学科について	12	34	26	21	7	3.23	14	53	24	8	1	3.71	2. どちらかといえば関心・興味がない。
⑦農業地域と農業食糧問題	9	23	37	25	6	3.04	19	39	34	8	0	3.69	1. ほとんどまたは全く関心興味がない。
⑧人種・民族の特徴と諸問題	14	35	34	13	4	3.42	24	33	31	11	1	3.68	ただし⑧については
⑨貿易の成り立ちと現状	6	21	45	22	6	2.99	15	34	37	12	2	3.48	たいへん好きである。
⑩都市の発達・地域構造と都市問題	6	28	40	20	6	3.08	11	38	38	12	1	3.46	4. どちらかといえば好きである。
⑪交通問題	9	24	48	16	3	3.20	9	35	47	7	2	3.42	3. どちらともいえない。
*⑫日本や世界の地誌	12	27	35	19	7	3.18	13	32	36	17	2	3.37	2. どちらかといえば嫌いである。
⑬水産資源と水産業	3	15	37	34	11	2.65	11	35	35	17	2	3.36	⑫
⑭世界の大地形分布と成立の原則	10	30	32	20	8	3.14	9	31	42	15	3	3.28	5. 大いに役立った。
⑮世界の気候・土壌・植物帯成立の原則	6	23	41	23	7	2.98	10	28	37	19	6	3.17	4. どちらかといえば役立った。
⑯金属資源の分布と資源問題	4	17	43	28	8	2.81	8	28	45	16	3	3.22	3. どちらともいえない。
⑰工業立地と工業地帯成立の原則	3	15	37	31	14	2.62	9	29	39	20	3	3.21	2. どちらかといえば役立たなかった。
⑱森林資源と林業	2	12	38	36	12	2.56	2	13	44	32	9	2.67	1. ほとんどまたは全く役立たなかった。
⑲大縮尺図の読図	7	17	30	27	19	2.66	7	17	32	31	13	2.74	2. 40
**⑳地図投影図原理	6	15	26	28	25	2.49	1	14	28	38	19	2.40	3. 46
①～⑳の平均値						3.07						3.46	②～③
*㉑国際理解に対する影響度	9	48	34	6	3	3.54	46	46	8	0	0	4.38	5. 大いに利用した。
**㉒地図帳の利用度	21	40	25	11	3	3.65	6	34	34	24	2	3.18	4. どちらかといえば利用した。
㉓日本国勢図会の利用度							14	37	31	16	2	3.45	3. どちらともいえない。
*㉔情報の真実性について（情報提供者と選択）	57	32	10	1	0	4.45	68	23	7	2	0	4.57	2. どちらかといえば利用しなかった。
㉕情報の分析・評価・判断について（総合的判断）	68	24	7	1	0	4.59	74	16	10	0	0	4.64	1. ほとんどまたは全く利用しなかった。
㉖社会・政治・経済問題について判断する基準	53	32	12	2	1	4.34	65	27	8	0	0	4.57	㉗～㉘
㉗望ましい社会科の授業について	a 82	b 15	c 3			a 91	b 6	c 3					本文参照のこと。

* 1975 年・76 年の平均値 ** 1977 年のみの数値

が、「国際化とはどういうことか」「国際理解教育とはどのようなことを認識させる教育なのか」、こうしたことが案外曖昧で十分認識されていないように思う。

国際社会とは、主権国家がそれぞれの独立性を維持しながら、相互依存によって共存共栄をはかっていく平等な社会と規定できるだろう。しかし現実には「北」の繁栄と「南」の貧困という南北問題、東欧を中心とした社会主義国の変動の中で様変わりしている東西問題などが存在している。こうした多くの課題を内包した国際社会を学際的方法³⁾などにより解き明かすと同時に、その方向性をさぐる教育が国際理解教育だろう。地理の立場でいえば国際地域研究で、人間性の尊厳につながるその国固有のアイデンティティと国際秩序への調和化＝国際性を理解することである。

国際化とはモノ・カネ・ヒト・情報の国際交流（移動）が活発になる現象と一般的にはとらえられている。しかし、それは現象的なとらえ方で、意識の交流が内蔵されていることが必要である。矢野暢⁴⁾によると『『国際化』には国益を別の方法で追求しようとするいわば国益の恣意的な延長としての『国際化』と世界の望ましい調和化と秩序化の筋書にわが身を委ねようとする『国際化』のふたつ』があり、「国際化とは『固有のアイデンティティをもった一国民ないし一民族を、もっと摩擦の少ないかたちで、国際的に定位させるための努力』である」と定義している。そして、摩擦を少なくするために「国際的意思疎通の努力とか相互理解、文化理解という課題が出てくる」としている。

国際理解という概念については、それぞれ異なっているかもしれないが、それに関する様々な教育実践が兵庫県内でも多い。⁵⁾⁶⁾また国際理解に関連して、日本と他国の青少年の意識を調査した報告もある。⁷⁾⁸⁾⁹⁾

そして、筆者も今回「はじめに」で述べたような経緯を経て、国際理解教育の第1段階ともいえる各国の実情調査を、第3学年地理選択クラスの生徒へ「卒業レポート」として、提出させることができた。

2. 学習の流れ

1989年度の実践を、反省点などを補足しながら、

記録しておく。

1989年

7月中旬

大使館発行のパンフレット類は新鮮な地理教材として有意義であり、その活用で考えた。また3年の3学期は実授業時数が少ないので、生徒たちの自主的活動によって有効に展開したいと考えた。10月（2学期中間テスト後）

3学期の授業は2学年時の地域研究¹⁰⁾の延長として、世界の国についてのレポート作成を中心して授業することを予告した。

11月6日

世界の国々のうち83カ国を選んで、各国大使館・領事館宛に資料送付の依頼書を出した。83カ国を選んだ基準は、生徒たちが興味を持ち、選びそうな国であること、日本との関係が深いと考えられている国であることの二点である。その結果、11月中旬から12月中旬にかけて53カ国からの資料が到着した。（遅い場合、1月31日に到着した。）依頼した資料は日本語で書かれたものという条件を出しているため、資料が十分ない国もあった。英文のものならばもっと豊富で最新のものが得られる場合もあった。¹¹⁾

12月14日ごろ（2学期期末考査後）

卒業レポートについての詳しい説明と各自がどの国を分担するかを選定を行った。

12月中旬から1月中旬にかけてレポート作成のために図書館で授業を行うこと、レポートはB4サイズの印刷用紙にまとめ、そのままを印刷して冊子にすること、3学期の評価はレポートを主材料にすること、一クラスの中で調べる国が重複しないように分担すること、以上のことを説明した。一つのクラスで同じ国を分担する者がでないようにしたのは自由に選ばせると、どうしても特定の国に希望が集中すると予測したからである。実際、希望をとると3クラスとも同じような国に複数の希望があり調整の必要がでてきた。生徒がどんな国を希望したかについての分析は十分できていないがそれに関して、4で少し述べたい。

12月下旬

図書館を利用し、資料収集と構想立案の時間とした。大使館からの資料を配布し、各クラス2回づつ行った。図書館の活用は学校教育の大切な指導項目と考えられるが、十分に行われているとは

いえない。地理授業で活用を試みたわけであるが、柏原高校図書館は比較的多くの図書が整っている割には、地理関係の資料は古く十分な量があるわけではない。参考までに生徒がよく利用していた図書館資料としては次のようなものがあった。かなり古い資料もよく利用されていた。

平凡社『世界大百科事典』(1981年)

小学館『ジャポニカ、大日本百科事典』(1969年)

TBS『ブリタニカ国際大百科事典』(1974年)

1990年

1月上旬

図書館を利用してレポートをB4サイズ1枚にまとめる作業をさせた。各クラス2時間づつ当てたが、2回の授業時数では不十分であった。さらに図書館や家庭で時間を費やした生徒も多くいた。

1月16日

レポートの締切。印刷して発表することを通知していたこともあり、ほとんどの生徒がよく工夫された見ごたえのあるレポートを提出した。やはり他人に見られることが、生徒たちをより意欲的にさせたと考えられる。

1月下旬

最後の授業を利用して、印刷したレポートを配布し、クラスごとに冊子にした。その冊子は生徒たちが世界にはばたいてくれること願い「翔」と名づけた。そしてそれを生徒にしっかり読ませるために、各クラスのベスト3を選ばせた。ちなみにベスト3に選ばれたレポートを稿末に掲載しておく。

3. 生徒の感想の集約と分析

まず生徒の感想をあげておこう。

- 資料がほとんどなくて苦労した。リゾート地として有名なので、いかにも南国で小ぎれいな島だと思っていたのに、シャワーは海水でフルーツも輸入しているなんて現実には厳しいものだった。他にカツオの食べ方なども書きたかった。せっかく新鮮なカツオがとれるのに、イスラム教の国なので生で食べないためタタキは食べられない。
- エチオピアについては表面的に知っていたけれど、詳しく調べていくうちにいろいろな問題をかかえている国だと分かった。そしてその原因や私たちに今できることなどを考えるよい機会

になったと思う。

- まず国を選ぶ時、なるべく誰も知らない国、あまり有名でない国ということでネパールを取り上げたが、文献が少なく少し苦労した。しかし自分でもまあまあと思えるものができた。旅心の強い私としてはいろいろな国のことを知れてよかったです。きっと何年か後には世界を飛び廻っていたいです。

- 大使館の資料が古くてわかりにくかったが、新聞の政治面とかを読むようになって少しずつわかり出した。

- 調べるために資料とか百科事典とかを読んでいて、授業では習わなかったその国の歴史的なことやおもしろく興味深いことにいくつも出会うことができ、授業とは違った面でたいへん勉強になった。スペースの関係で書きたいことが十分書けなかったところもあるが、1枚にまとめるのもむずかしいものだと思います。みんなのレポートを見て、それぞれ一味違った魅力のあるものばかりで、またきれいにまとめているものも多くて感心しました。それぞれみんな苦労の木の力作なのではないかと思います。そしてきっと何かを得たのではないのでしょうか。

生徒の感想を集約すると以下ようになる。

- ① 調べてみるといろいろとおもしろく、その国に愛着が持てて行ってみたくなったこと。
- ② その国の実情や問題点がよくわかったこと。
- ③ 1枚の紙にまとめるのがむずかしく、苦労したこと（枚数を増してほしいという意見もかなりあった）。
- ④ 大使館の資料が古かったり十分でなく、活用しにくいこともあり、自分で資料を探し出して調べるのがたいへんだったこと。

生徒たちはいろいろと苦労して自分なりに資料をよく探し出している。また、まったく大使館資料を使わずにやっている場合もあった。

調べることを自分で選択し十分な時間をかけて調べて、1枚の紙に表現するこの過程は、生徒にとって多くの苦労と時間が必要になってくる。しかし、調べが進むにつれて興味深いことが発見され、自分がやってきたことが具体的な形で現われてくるものである。限られたスペースに工夫してまとめて表現することの難しさと楽しさを知ったことと思う。そしてこの試みは所期の目的である

国際理解にも役だったと確信している。

大使館資料を活用することについてはかなりの問題点が出てきた。一つは資料が古く、量的に少ない国がかなりあったことである。これはその国の経済発展の程度や日本との関係の深さに起因することで、大使館資料の比較・分析をすることはおもしろい研究になると考えられる。第二点は、全面的に大使館資料に依存してしまい、偏った内容のレポートになる場合もみられたことである。かえって与えられた資料が少ない方が、その資料に頼らず自分で発見・発掘した資料によって、よりよいレポートになる場合が多かった。つまり生徒の選択・開発能力の育成につながるものであった。

4. 中学生・高校生から見た国のイメージ

越智秀三郎⁸⁾の研究は国のイメージを5段階の好感度で評価している。好感度の高い国のイメージは①風景の美しい国(4.52)②天然資源の豊富な国(3.74)③古く文化の栄えた国(3.67)で、逆に低い好感度の国のイメージはA軍事大国(1.66)B社会主義国(2.55)C政治大国(2.61)となっている。()は好感度の評定平均値である。具体的な国の評定平均値の高いものをあげると表2のようになる。

好感度の高い国は上のイメージの①～③をほぼ2個は持っている国といえるだろう。ただし、アメリカ、イギリス、フランス、中国はマイナス面であるA～Cもあわせ持つ。特に中国は①～③とA～Cのすべてを持つ国である。

一方、志賀照明⁹⁾は日本とタイの二つの国の国民の持つイメージを比較的に集約している。それによると日本人の集計は越智氏と同様な結果となっている(表3)。ただソ連がかなり上位に位置している点が異なっている。しかし、タイ人の場合は大きく違っており、示唆的である(表4)。行きたい国は日本が最上位にあり、日本との関係の深さを物語っている。ところがよく見るとバンコクと北部地域とでは異なった様相を示す(表5)。直接日本人及び日本製品と接する機会の多いバンコクの中学生は日本に対する関心が当然の如く高い。しかし直接的に「日本」と接する機会が少ないと考えられる北部地域の中学生は日本より、オセアニアへの関心の方が高い。これはどういう意

味・原因かわからないが興味をそそる結果である。

それに関連して表6を見ていただきたい。日本人を好きとする理由は日本人や日本を外面的・表面的にとらえたもので、日本人を嫌いとする理由は日本の姿勢や日本人の内面・本質をとらえたものとする見方ができないだろうか。表7は勤務校における生徒たちの選択状況を示しているが前に述べた表と同様の結果といえるだろう。発展途上国に資料未到着国が多いのは当然だが、日本と関係の深い西アジアの国がそれに多く含まれているのが意外だった。

おわりに

この卒業レポートを作成する取組みは、筆者にはいろいろと考えさせられることが多かった。それは、教師が自身で獲得し生徒に伝達できる知識には限界があるが、生徒自らがそれぞれ苦労して得た知識・認識には目を見張らせるものがあり、しかもそれはしっかり記憶されるということである。自明のことではあるが。

ところで、地理教育に携わる一員として、国際理解について筆者自身は次のように考えている。それは相手国および国民を正しく認知することからはじまり、自分の国との差異を知り、そして、自分の立場を認識して、日常いかに行動していけばよいかを考えるところにまで到達すべきである

表2 国に対する好感の評定平均値

国名	M	国名	M
スイス	4.15	スウェーデン	3.38
オーストラリア	4.09	エジプト	3.28
日本	3.86	イタリア	3.25
イギリス	3.67	西ドイツ	3.23
ギリシア	3.67	スペイン	3.14
オランダ	3.61	中国	3.12
アメリカ合衆国	3.59	フィンランド	3.06
ニュージーランド	3.57	デンマーク	3.06
フランス	3.56	メキシコ	2.94
カナダ	3.55	アルゼンチン	2.90

越智秀三郎(1988)より

表3-a 行きたい国上位20カ国
1人3カ国まで(記)

順位	国名	人数(394名)
1	アメリカ合衆国	217名
2	オーストラリア	165
3	スイス	121
4	フランス	106
5	中国	81
6	エジプト	66
7	イギリス	59
8	オランダ	58
9	ギリシャ	32
10	カナダ	29
11	ニュージーランド	18
12	ソ連	18
13	ドイツ	12
14	香港	12
15	ブラジル	10
16	アフリカ	10
17	韓国・朝鮮	9
18	イタリア	8
19	スペイン	7
20	北極	7

1986年2月(調査対象:神戸市立兵庫商業
高校 1年生 394名)

表3-b 行きたい国上位20カ国(記)

順位	国名	人数(1001名)
1	アメリカ合衆国	564名
2	フランス	287
3	イギリス	251
4	スイス	227
5	オーストラリア	194
6	中国	154
7	カナダ	118
8	ドイツ	95
9	ギリシャ	86
10	エジプト	75
10	イタリア	75
12	ソ連	54
13	スペイン	40
14	オランダ	34
15	オーストリア	28
16	スウェーデン	27
17	ブラジル	25
18	ニュージーランド	22
18	インド	22
20	メキシコ	20

1981年東和大学国際教育研究所調査(調査
対象:ICU高校382名, 昌平高校488名,
永福高校131名, 合計1001名)

表4 行きたい国上位10カ国(記)

The United Village School (81名)	バンコクの中学校(125名)	計
1 日本 68名	1 日本 98名	1 日本 166名
2 アメリカ合衆国 62	2 アメリカ合衆国 90	2 アメリカ合衆国 152
3 英国 33	3 英国 54	3 英国 87
4 中国 26	4 フランス 31	4 中国 49
5 スイス 6	5 中国 23	5 フランス 34
6 カナダ 6	6 ヨーロッパ 12	6 ヨーロッパ 15
7 ニュージーランド 5	7 シンガポール 6	7 シンガポール 10
8 フィリピン 5	8 オーストラリア 5	8 カナダ 9
9 シンガポール 4	9 ホンコン 4	9 オーストラリア 8
10 ホンコン 3	9 マレーシア 4	9 ニュージーランド 8
10 フランス 3	9 オランダ 4	

1986年8月調査

- The United Village School のM2・M3の生徒81名(北部タイ)
(タイ族35名, カレン族38名, ムーサー族5名, モン族, ヤオ族, メオ族1名)
- バンコクの中学校2・3年125名(Watsungwet School)

表5 世界の関心地域(選)

地域	学校名	The United Village School	バンコクの中学校	計
1 朝鮮半島		0(%)	1.6	1.0
2 中国本土		3.6	7.1	5.7
3 東南アジア		4.8	4.8	4.8
4 南アジア		1.2	0	0.5
5 西アジア		0	0.8	0.5
6 西ヨーロッパ		7.2	5.6	6.2
7 ソ連		1.2	1.6	1.4
8 東ヨーロッパ		3.6	0.8	1.9
9 北アメリカ		6.0	4.8	5.3
10 中・南アメリカ		7.2	4.0	5.3
11 アフリカ		2.4	0.8	1.4
12 オセアニア		2.0	4.0	10.5
13 日本		14.5	45.2	33.0
14 その他		1.2	1.6	1.4
15 すべての地域に関心あり		26.5	17.4	21.0

注.(記)は記述式、(選)は選択式のアンケートを示す

表3-a、表3-b、表4、表5はいずれも志賀照明(1989)より

う。このように、自分の行動にまで結びつけることができるようになって、はじめて国際人の名にふさわしい存在になるのではないだろうか。

こう考えてみると、今回のレポートで得た生徒たちの諸国に対する認識は、自分たちの力で獲得したものであるが故に、本当の国際理解につながるものになったのではないだろうか。単なる知識

注入の授業では得られない何かを得て、それが自分の行動にまで結びつく自覚になればと、淡い希望を抱いている。

また、この素晴らしい生徒達の成果を今後の授業の中で還元していきたいものとも考えている。卒業レポート『翔』は、筆者にとってかけがえのない唯一の地理資料集である。

注

- 1) 細見和弘(1990):「ズームアップ氷上」の作成、
兵庫県立柏原高等学校研究紀要2

- 2) 久保田武(1978):地理教育の効果、古今書院
『地理』23-2

- 3) 近藤代 (1989) : 国際理解教育について、『地理・地図資料』1989年11月号
- 4) 矢野暢 (1986) : 国際化の意味、日本放送出版協会
- 5) 高木応光 (1989) : 英語による「地理」の授業－ハイマー先生の授業から国際理解を考える－、兵庫県立伊丹北高校『鴻志』6
- 6) 兵庫県高等学校教育研究会英語部会 (1989) : 英語を通じての国際理解教育－教科書分析と教材開発－
- 7) 志賀照明 (1989) : タイの中学生がみた日本－1988年のアンケート調査結果－、兵庫地理学協会『兵庫地理』34
- 8) 越智秀三郎 (1988) : 高校生を対象にした国のイメージに関する実証的研究、兵庫県社会科研究会『兵庫県社会科研究会紀要』35
- 9) 兼松儀郎 (1987) : 高度産業社会における青少年の意識構造－日本とオーストラリアとの比較研究－、兵庫県立小野高等学校『研究紀要』2
- 10) 郷土研究を夏休みの課題として実施した。詳細は前掲(1)を参照。
- 11) 大使館から、英文のものならばあるという連絡を受けた国もある。
(ほそみ かずひろ・兵庫県立柏原高等学校)

表6-a 日本人を好きとする理由

(記)

1. 日本の文化がいい、おもしろい	28人
2. 日本人がかわいい	22
3. 経済、技術が発達している	21
4. 先進国	20
5. 日本人はかっこいい	19
6. 日本人はよく働く	18
7. 自然、景色がきれい	18
8. 日本人はやさしい	17
9. 礼儀正しい	10
10. 経済がしっかりしている	8

表6-b 日本人を嫌いとする理由

(選)

1. アジア諸国への日本の一方的経済がさかんで、そのひずみを感じている。 31人 (33.7%)	
2. 日本人は過去にアジアを侵略したことがあり、その反省も十分でないと考える。 31人 (33.7%)	
3. 日本は先進国であるが、アジア諸国への援助に無関心である。16人 (17.4%)	
4. アジア諸国での日本人の行動に問題があると感じている 7人 (7.6%)	
5. その他の理由 4人 (4.3%)	
○日本人はずるい。 ○日本人は自分にとって得するならつきあう。 ○日本人はきらい。 ○好きな人もいるし、好きじゃない人もいる。 ○だいたいのタイ人は日本人を好きじゃないと思う。 ○日本人の性格は不可解。	

表7 資料到着国と生徒の選択数

人数	資料到着国(到着率 67.5%)	資料未到着国	資料未請求国
3	イギリス、イタリア、オーストリア、ギリシア、スイス、スウェーデン、デンマーク、西ドイツ、ノルウェー、フランス	スペイン	
	フィリピン		
	アルゼンチン、ペルー		
	南アフリカ		
2	アイルランド、オランダ、チェコスロバキア 東ドイツ、ポルトガル、モナコ		
	(シンガポール) スリランカ、タイ、大韓民国、中国、マレーシア		
	エクアドル、ブラジル	アメリカ ⁽¹⁾ 、メキシコ	
	ケニア、コートジボアール	エジプト	
1	オーストラリア、ニュージーランド		
	ソ連 ⁽¹⁾		
	ハンガリー、フィンランド、ベルギー、ユーゴスラビア、ルクセンブルグ		
	イスラエル、インド、(インドネシア) サウジアラビア、トルコ、モンゴル	ネパール、ベトナム	アフガニスタン モルジブ 台湾
0	ウルグアイ、カナダ、チリ、ハイチ、ベネズエラ		西サモア ニューカレドニア ※
	ガーナ	エチオピア	
		ポーランド、ルーマニア	
	ミャンマー	アラブ首長国、イラク、イラン、クウェート パキスタン、バングラディッシュ、ブルネイ、ヨルダン	
		キューバ、コロンビア、パナマ、パラグアイ ボリビア	
	(ダンザニア) モロッコ	アルジェリア、ザイール、ザンビア、スーダン、ナイジェリア	

注. () は英文資料、※はオセアニア州、人数は調べた生徒の人数

(1) は途中で3人から2人に減少

12月下旬から1月にかけて遅着した国 ブルガリア、リビア、リベリア

ドイツ連邦共和国

~FEDERAL REPUBLIC OF GERMANY~

3-7-23 古林 あつみ

首都名 ボン

日本の $\frac{2}{3}$

面積 24.8 万km²

人口 6114 万人

人口密度 245 人/km²

土地利用 耕地 30.0 %

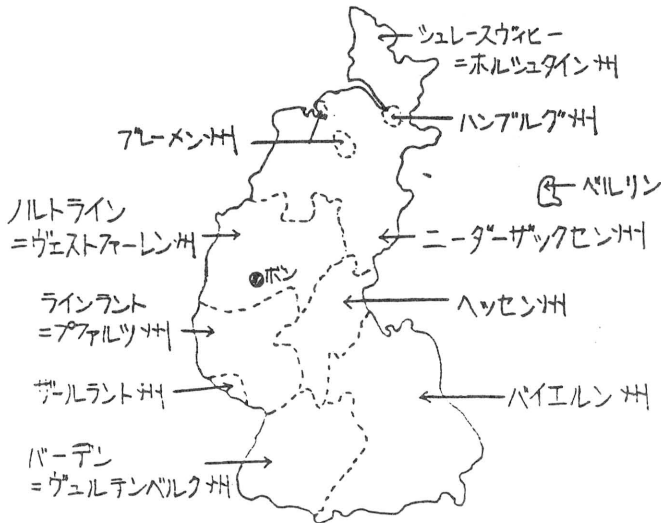
牧場 18.8 %

国土の $\frac{1}{3}$ 森林 29.5 %

その他 19.9 %

言語 ドイツ語

民族 ゲルマン民族



※ 州 ※ < ブレーメン・ハンブルグ・ベルリンは、都市州である。 >

バーデン = ヴュルテンベルク州

首府 シュトゥットガルト

“工業化の度合 No1 の州”

“ダイムラー = ベンツの自動車”
が有名である



バイエルン州

首府

ミュンヘン

“かくれた首都”

“バイエルンビール”

ハンブルグ州

ハンブルグ市 = “出版業の中心”

“西ドイツ最大の港”



ザールラント州

首府 ザールブリュッケン

・ザール炭田

・ザールラントの

経済にとっては、フランスが重要な貿易相手国である。

ブレーメン州

首府 ブレーメン

“西ドイツ最小の州”

“西ドイツ No2 の海港”

ニーダーザクセン州

首府 ハノーバー

“産業・見本市都市”

⑥ ヴォルフスブルグ = フォルクスワーゲン社の所在地

ヘッセン州

首府 カッセル

・フランクフルト → “金融の中心”

シュレースヴィー = ホルシュタイン州

首府 キール

・2度に亘るデンマークとの戦争の後、1864年ドイツのものとなる。



ノルトライン = ヴェストファーレン州

- 最も人口の多い州 ... 西ドイツの人口の約 1/3
- 首府 デュッセルドルフ → 「商業の中心」
- ミュンスター → 「大学都市」
- 『ルール地方』
- 鉄鋼の生産量 「世界第4位」
- ザーリングェン = 刃物
- クレーフェルト = 絹織物

ベルリン州

- 『ドイツ最大の工業都市』
- 『文化と芸術の中心地』
- 仏管理区
- 英管理区
- 米管理区
- 「ベルリンの壁」

ラインラント = アッフルツ州

- 首府 マインツ
- 『食料ワインの生産割合が高い!』

- ⑥ ドイツのばどう畑の 3/3 がこの州に集まっている。

西独の鉱工業

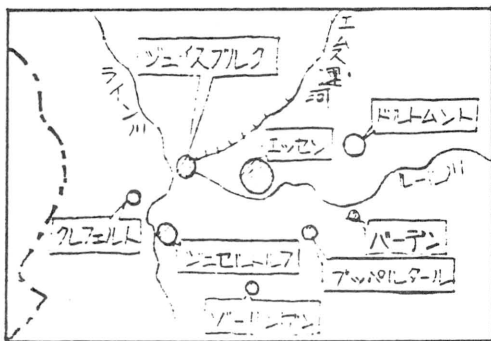
〜 『ルール地方』 〜

“ヨーロッパ最大の重化学工業”

- 東西 80km, 南北 40km
- 西ドイツの石炭の 89%, 粗鋼の 72% を生産している。
- ルール炭田

〜 主要都市 〜

- ① ヌイスブルク ... 重工業・西ドイツ最大の河港
- ② エッセン ... 製鉄
- ③ ドルトムント ... 製鉄
- ④ クレーフェルト ... 絹織物
- ⑤ ヌーヴェルドルフ ... 中枢管理機能都市
- ⑥ バーデン ... 紡績機械
- ⑦ ザーリングェン ... 刃物
- ⑧ アッパルタール ... 紡績機械



ドイツビール

- ビールには、香りが華やかな上面発酵ビールと、日持ちのよい下面発酵ビールの2種類がある。日本を初めビールの大半は、下面発酵のピルスナービール (Pilsnerbier) <ピルス Pils> というビールが多いのである。
- 上面発酵ビール
 - ① クルンビール Kölschbier ... 淡い黄色で、あまじりしている。(ケルン)
 - ② アルトビール Altbier ... 赤褐色でホップが効いている。(デュッセルドルフ)
- 下面発酵ビール
 - ① ミュンヘンで誕生した。このビールの都では、3月のメルツェン (Märzen), 5月のマイボック (Maibock), 10月のオクトーバーフェストビールなど、その季節限りのビールが出回る。
 - ② ヱイツェンビール Weizenbier ... 小麦が原料。泡立ちがきめ細く、少々酸味が強い。レモンを浮かべて飲む。

ドイツ最大のビール生産地は、ミュンヘンでなく、ドルトムントだ! このビールは、辛口。

- ③ ベルリナー・ヴァイツ Berlinerweiße ... ベルリン名物。小麦が原料。酸味が強い。ラズベリー・ヤチエリーのサイロップを混ぜて飲む。

ホップ ... ヨーロッパから西アジア原産。ビール、苦みと香気アツクに利用。

ドイツ語ミニ会話

- おはよう / Guten Morgen アーテン・モルゲン。
- こんにちは / Guten Tag グーテン・ターク
- ありがとう / Danke schön ダンク・シェーン
- さようなら / Auf Wiedersehen アウフ・ウィーダー・ゼー・エン

ホップ →



- <大使館パンフ「西ドイツ」>
- <エアリアガイド「西ドイツの旅」>



・ライン川を行く

西ドイツの中央部の西寄り、マインツの近くから首都ボンまで南東から北西へつらぬくライン峡谷は、ローレライの伝説でよく知られているが、このライン峡谷をたずねる日本の観光客は、大抵1次の3つのことにおどろき目をみはる。

第1は、ライン川の流れるが予想に反してゆるやかなことである。ライン峡谷というと、日本ラインのような激流を想像する日本人が多いが、本物のラインは、流れるがたいへんゆるやかで、いったい流れているのか、止まっているのかわからないぐらいである。くわしい地図で調べるとマインツの標高は80m、ボンは60m、そしてその距離は125kmにも及ぶので、勾配は1kmにつきわずか16cmにすぎない。

第2は、上下する船の数がきわめて多いことである。そして、船の大部分は貨物船であって、長さ80mほどの同じ形をした貨物船が、ひっきりなしに上下している。石油輸出用の小型タンカーも多い。

第3は、それらの船の国籍がまちまちで、船尾にはいろいろな国旗が見られることである。西ドイツのほか、下流部のオランダ、上流部のフランスやスイスの船も見られる。ライン川は文字どおり国際河川なのである。

しかし、西ドイツはヨーロッパ最大の工業国であるため、川の汚染がひどく、ライン川をはじめ大小の河川が水質汚濁である。そのほか、大気汚染も深刻でシェールツバルトの木が酸性雨により枯らされている。西ドイツの最重要課題の環境問題を解決することが大切である。

ドイツ連邦

・ハンブルク市民の誇り

西ドイツの自動車のナンバープレートには、ケルンはK、ミュンヘンはMというように、都市名の頭文字が入っているが、ハンブルクはHではなく、HHとなっている。

これは、ハンザ都市ハンブルクの略だという。ハンザとは商人仲間という意味。

ドイツ北部にある諸都市は中世から近世のはじめにかけて、リューベックを盟主として、ハンザ同盟を結び、北海・バルト海貿易に活躍したが、ハンブルクはその重要メンバーの一つであった。

ハンブルク市民は、いまでも、それを誇りとしているのである。

・アウトバーン

発達する道路交通---西ドイツでは全土に鉄道がくまなく発達し、路線の長さには、日本のJRの約1.5倍もあるが、近年は、乗客も貨物もあり増えず、鉄道事業は赤字で苦しんでいる。

道路のうち、有名なのはアウトバーンである。アウトバーンは、第2次世界大戦前にヒトラーのナチスによって建設され、戦後さらに、新しいものがたくさんつくられて、いまでは国内の主要都市の間を網の目のように結んでいる。

アウトバーンの特色---アウトバーンは日本の高速道路とちがって料金を払う必要がないため、インターチェンジに料金徴収所をつくる必要がないので、インターチェンジが簡単であり、したがって、その数も日本よりずっと多い。

アウトバーンは最高速度の制限がないので、時速120km、あるいはそれ以上の速さで飛ばしている自動車が多い。

ライン川の川船と同じく、アウトバーンでも外国の自動車が少なくなく、ベネルクス3国やデンマーク、スウェーデンなどから、スイス、オーストリア、イタリア方向へ向かう自動車も、西ドイツのアウトバーンを飛ばしていくので、ことに夏の休暇のシーズンには、アウトバーンは車でいっぱいになり、しばしば渋滞が起る。

共和国

面積・248.7(km²)---日本の約66%
人口・6105(千人)---日本の約50%
人口密度・245(人/km²)
人口増加率・-1.9(%)---減少

首都 ボン 29.1(万人)
国民総生産(GNP) 667.970(百万米ドル)
1人当たりのGNP 10940(米ドル)
[統計1985年]

2組10番 杉本 勝

・ドイツの分裂とベルリン

・ドイツの分裂---ナチスドイツは1939年、第二次世界大戦をひきおこし、一時はヨーロッパ大陸のほとんどを占領したが、連合軍の反撃にあい、1945年5月に無条件降伏した。

戦後、オデール川とその支流ナイセル川以東はポーランドが管理し、そのほかは4地区に分けて、アメリカ、イギリス、フランス、ソ連の4国が管理することになった。ところがソ連と他の3国の間で、管理のしかたについて意見の対立がはげしくなると、1949年9月、西部の米英仏管理地区がドイツ連邦共和国(西ドイツ)をたてたのに対し、東部のソ連管理地区は翌10月、ドイツ民主共和国(東ドイツ)をつくった。

西ドイツは、アメリカの経済的援助と国の政策の成功により、独立後めざましい復興を遂げ、奇跡の復興といわれた。今では、西ドイツの国民総生産や一人当たりの国民所得は、イギリスやフランスをはるかに抜いており、西ドイツの通貨マルクは西ヨーロッパで最も安定した通貨の一つとなっている。

そして、分裂を最も表わしていたのがベルリンである。ベルリンは東ドイツの中央部にあるが、やはり、東西に分裂をした。そして東ベルリンが東ドイツに属し、その首都となっている。西ベルリンは形式的には、米英仏の管理下にあるが、実際には西ドイツの一部となっている。

しかし、周りを東ドイツ領に囲まれた西ベルリンは、東西の冷戦の時代、ソ連のベルリン封鎖やベルリンの壁が一方向的に築かれるなど「陸の孤島」となったがそれから28年、ソ連のペレストロイカや東ヨーロッパの民主化により、冷戦の象徴であったベルリンの壁が取り壊われ、東西冷戦の終結ともいえるべき結果となったが、ドイツの再統一などの諸問題も残っている。

・工業の中心ルール地方

ボンで峡谷から流れ出たライン川は、さらに一路北西へ向かうと、左岸にケルン、右岸にデュッセルドルフの町がある。さらに下ると、右岸にデュイスブルクがあるが、ここから西に広がっているのが、西ヨーロッパ最大の鉄鉱工業地帯ルール地方である。

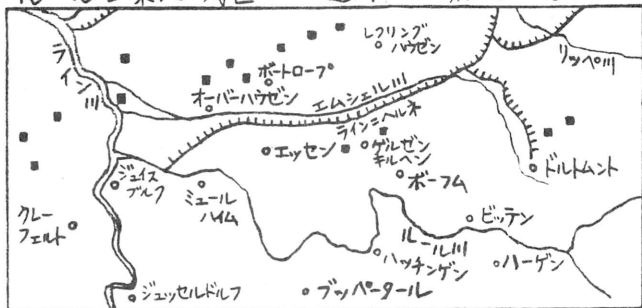
デュイスブルクがその入り口であり、港には鉄鉱石などの原料などの原料を積んだ川船がひんぱんにやってくる。そこから東へ、エッセン、ドルトムントなど多くの工業都市がならんでいる。

工業の発達する基盤条件となったのは、ルール炭田の存在である。19世紀になって、地下数百メートルの炭層の開発が進むにつれて、それまで静かな田園地帯であったルール地方は、いかに活気を帯びてきた。炭田の南部で出る石炭は、コークスの製造に適した粘結炭であったので、製鉄業をはじめ製鋼圧延、鋳物、機械、車両など、一連の鉄関係の工業が発展した。原料の鉄鉱石は初期には南部

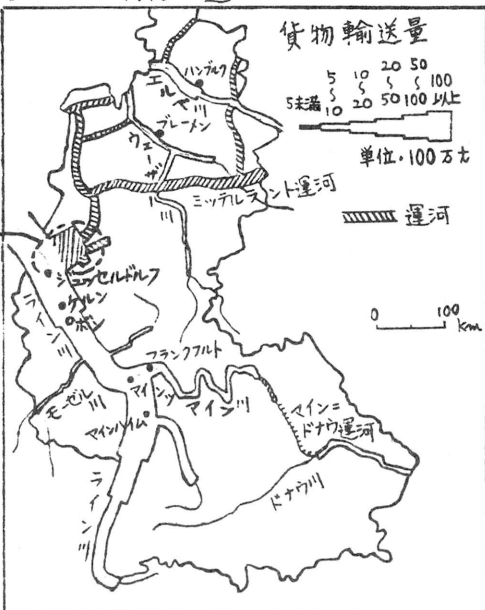
の山地から採り出されたが、後にはフランスのロレーヌ地方やスウェーデンなど外国の鉄鉱石がライン川や運河を通じて運ばれてくるようになった。おかげで開発された炭田北部の石炭は化学工業原料に適した石炭なので、ここでは肥料・染料・化学薬品などの化学工業が発展した。

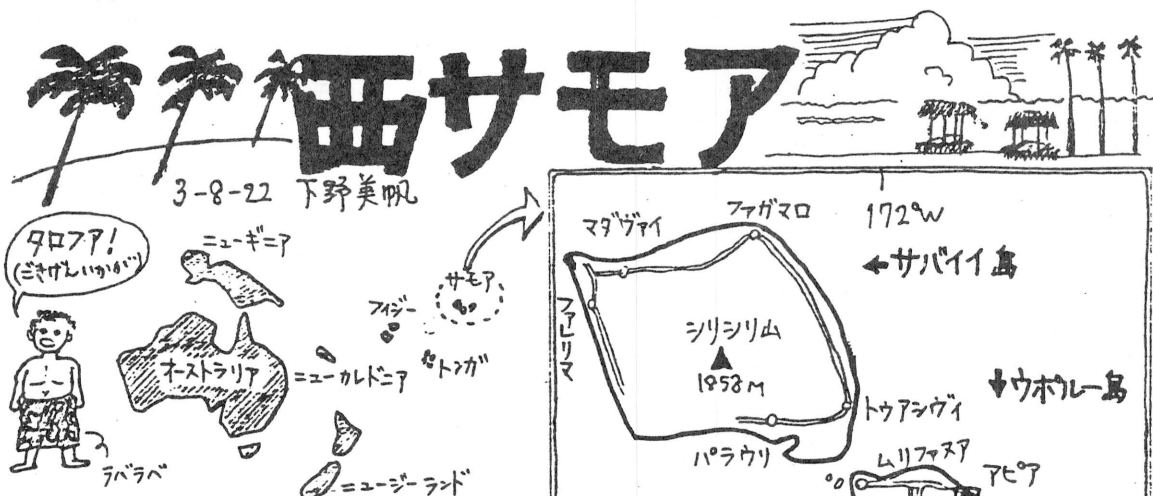
近年は、いわゆるエネルギー革命のため、石油の使用がふえ石炭は減ってきたので、ルール地方の石炭産業もふるわなくなり、能率の悪い炭鉱から閉鎖されてきている。北部の化学工業も、石油を原料とするものが多くなっている。

・ルール工業地域[――は運河・は炭田]



西ドイツの内陸水運





Samoa i Sisiifo — 西サモア

南太平洋のサモア諸島のうち、西部の9島を占める共和国。面積2842平方キロ。人口15万人。公用語は、サモア語と英語。通貨はターラー(=100セン)。首都アピア。サモア諸島は西経170度、南緯13度付近。ウポルー、サバイイの2大島と、マリ、アポリマ島に住民が住む。首都はウポルー島にある。いずれの島も火山性で、概して地形が険しく、また落石流に広くおおわれている。最高点はサバイイ島で1957m、ウポルー島で1100mに達する。落石流を免がれた谷間や低い斜面は農耕に適した肥沃な土壌に恵まれている。各島の大半は、よく繁茂した原生林で、耕地が狭く、農業を主とする住民の生活は、自給自足経済の段階である。

住民 ポリネシア系の原住民が90%以上を占めている。原住民の形質的特徴は、男と女とも、きわめて体格が良い。世界でも長身の分類に属しており、皮膚はかす色、髪は黒くて直毛。彼らの祖先は、太古に東南アジアから出発し、メラネシアの島々を経由して、前1千年前後に、この諸島に渡来したものと考えられる。

気候 熱帯海洋性気候で、雨季と乾季とがある。アピアの年平均気温26.4度、年降水量は約3000mmに達し、南太平洋諸島中、最も高温多湿な地方の一つとして知られている。

気候表

アピア (13°48'S : 171°47'W 標高2m)

(理科年表1970による)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気温(℃)	27.0	27.0	26.7	27.0	26.4	26.4	26.4	26.4	26.1	26.7	26.7	26.4	26.4
降水量(mm)	424	364	352	214	186	130	115	111	147	221	279	385	2928

歴史 1722年、オランダのロッセ・ヴェーンによって、初めてヨーロッパ人に知らされた。19世紀に入ってから、英、米、独の3国によって支配権が争われ、結果、西経171度線を境界として、西側の独領と、東側の米領に2分された。世界大戦後、ニュージーランドの統治領となり、1962年の1月に独立を達成した。サモア社会の基礎をなす大家族(アイガ)の長であり、マタイ(酋長)の称号を有する約1万人の中から、45名の議員(任期3年)が選出され、国会を構成し、元首が、首相を任命する。閣僚は8名。

経済と社会 農業以外にみるべき産業はない。タロイモ、ヤマモ等、の自給作物の他、輸出向けに、ココナ(ココヤシ)、カカオ、バナナなどが栽培されている。これらは主に、オーストラリア、イギリス、ニュージーランドへ輸出される。総人口の80%がウポルー島一島に集中し、また20%が首都アピアに居住している。アピアはヨーロッパ風の外観をなしている。現在、全住民がキリスト教徒であり、学校教育も比較的よく普及している。

島のようす

NHK取材班と乗せたジープがサバイイの椰子林の中をひた走りに入る。20〜30mもある素晴らしい椰子。梢にはココナツの実がびっしりついている。島をほぼ一周している道路も、見事な椰子林もほとんどドイツ人が作ったものという。この椰子林の間に点々とサモアの部落がみえる。部落は、海岸に湧く泉を中心に馬蹄形に広がっている。近いから漁や航海にも都合がいい。子供達が「サハニー(日本人)と叫んで見物に来る。家屋は低い石垣の上に丸太を堀立にして建てる。屋根は細い木舞(ニミ)を作り、その上を椰子の葉、または砂糖キビの葉でふいている。斧を使わず、柱と梁、梁と棟木等すべてがずらばり合せてある。何しろ壁のない柱だけの家だから、外からはまる見えだ。

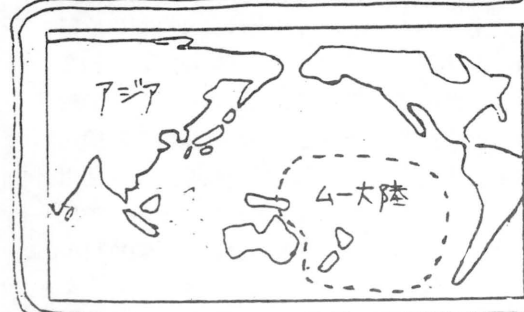
生活のようす

サモアではタロイモのほか、ヤマイモ、マンジョカ、パンの実などが主食になる。パンの実には夏ミカン位の大きさに蒸し焼きにするとホクホクと口ざわりがいい。お茶やコーヒーの代わりにココアを飲むのもサモアの面白い習慣だ。彼等は朝食は食べず、昼と晩だけ。食事は族長(マタ)の所に集まり、マタイ夫婦のお下がりを順順に食べる。村に生活して音もあげたことの一つはトイレだった。母屋とは別棟で、海の中に四本柱を立て、その上に作られている。陸とは桟橋でつながっている。円くあけた穴から見下すと、石炭湖(ラグーン)の澄んだ水がみえる。色とりどりの熱帯魚が泳いでいる。水洗式だ。首都アピアの市内を除けば、まだ貨幣経済は発達しておらず、専ら物々交換である。山奥へ入るに依りて、ココア、バナナ、タロイモと原始的な作物がある。所々に有力者が貧弱な乳牛を放牧している。風が少し強く吹くと、たちまち椰子の実がポタポタと落ちてくる。自然、上を伺って「オウ」ということになり、首がたるとい。

食人の国

食人の風習は、太陽など自然の猛威を恐れるため、また、戦の血祭や戦勝の祝賀など色々な説があるが、結局は食糧不足から人肉を食べるようになったのであろう。対象は捕虜の外、罪人、外来者、奴隷など。しかし、これは150年前の風習である。今日では、宗教心が厚く、蛮人とは思えない。酋長が石油ランプの下で黄色い面をむいてにやりと笑い「わしのおじいさんの頃までは、あんたの方のようなのを捕虜にして食べたまんたわさ。」と我々をからかった。(もちろん サモア語で)

てゴらす海の中	てゴらす海の中
下ミれるとに	下ミれるとに
さい入ます罰	さい入ます罰
入れ	入れ
サモア政府	サモア政府



海底に消えたムー大陸

南太平洋にかつて一つの大陸が、存在していた。——と言っても、あくまで仮説にすぎない。いわゆる ムー大陸と言われるもので、ムーは漢字で「無」と書く。つまり字義の上でも失われた大陸という意味をもっていたのである。姿を消したのは、ジュラ紀から白亜紀にかけてのことで、東南アジアから、南太平洋海域にわたる広大な海域を占め、東は南アメリカと相対峙していたと想像されている。それならば、どの理由から、大陸が存在していたことを立証されるかという、現在、南太平洋に無数に散在する島々である。そこには、東南アジアに共通する巨石文化の遺跡がみられる。散らばった島々が、その昔、ムー大陸の山々であったのか、あらたに隆起したものか、その解明は将来の研究に待つしかない。

資料。ブリタニカ国際大百科事典。世界の探検と開発。カコラマ。南太平洋。自然と人間。

